２００９

# ピクトグラムを使用したコミュニケーションツール

A Communication Tool using Pictogram

ＡＤ１６　亀田　翔馬
指導教員　井上　謙・菅原　由佳

## 1. 研究目的

私は視覚言語というものに興味を持ち、言葉が通じない人と図だけで会話できるようなツールが作れないか、と考えた。
図で共通認識を得られるものとして「ピクトグラム」というものがあり、ピクトグラムは日本が発祥の地であり、東京オリンピック開催時に外国語によるコミュニケーションをとることが難しい当時の日本人と外国人の間を取り持つために開発されたのが始まりである。私はこのピクトグラムを使用して、言葉が通じない人、話せない人とのコミュニケーションツールを提案できないかと考え調査にあたった。

## 2. 調査と分析

調査にあたり東京都聴覚障害者連盟の方にお話を伺った。まず、聾者が手話以外でどのようなコミュニケーション手段をとるか調べた。手段としては、絵で描いて伝える、文字を書いて伝える、などがあがった。しかし、絵では共通の認識をとりづらく、また、字を書くにしても時間がかかるという欠点があがった。

次に、言葉が通じない方とのコミュニケーションツールとしてどのようなものがあるかを調べた。その結果写真を指差して使用するものや、イラスト等で意思を伝える、というものがあった。しかし写真で伝えるものは明確な意志が伝わりにくく、イラストで伝えるものは、情報量は多いものの直感的には伝わりにくい。

そこでそういった欠点を改善し、言葉が通じない人が気軽に持ち歩いてコミュニケーションできるようなツールをピクトグラムを用いて作成することにした。

## 3. コンセプトの立案

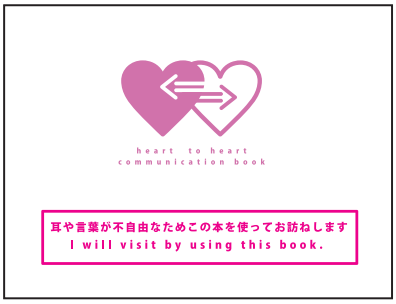
「気軽に持ち歩ける」ということが大前提になるので、手帳サイズの冊子を最終的な作品とすることにした。また、相手への意思表示をピクトグラムを指差して伝えるという方法をとることにした。

## 4. デザイン展開

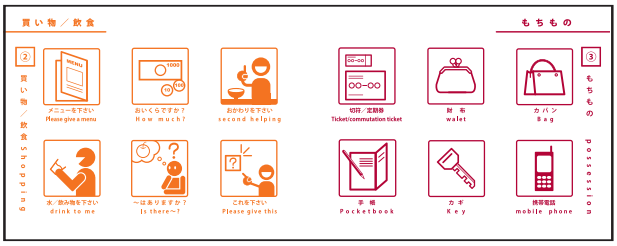
冊子として使用するにあたり、ただピクトグラムが載っているだけでは使いづらいので、使いやすくするためにピクトグラムの内容をジャンルで分け、それぞれにシンボルカラーを指定した。

また、コミュニケーションの要となるピクトグラムは当初は６ジャンル各６個、合計３６個であったが、中間調査の結果項目を増やす必要があったため、最終的に１２ジャンル各６個、合計７２個となった。また、言葉の通じない人に急に冊子を差し出してもコミュニケーションは取れないので導入となる文を新たに表紙に加える事にした。

## 5. 完成図




表紙の導入文が小さいと指摘されたので文字12pにを大きくし、四角形でかこうことによって視認性を向上させた。




## 6. 結論

東京都聴覚障害者連盟の方々に研究の最終案についてお話をお伺いしたところ、概ね好評をいただけた。改善点として、導入部分の文字をもう少し大きくする、順番を工夫する、項目を整理する、という事があげられた。基本的に「使いやすいものになっているので、もう少し項目に工夫を加えれば製品化を検討したい」という意見も頂けた。

今後、このようなツールが実際に使用され、より多くの人たちのコミュニケーションの助けとなれれば嬉しい。

## 7. 参考文献

「聴覚障害者が暮らすために」（東京都聴覚害者生活支援事業ニーズ調査委員会）
「電話お願い手帳」（NTT グループ）